兵庫県のグンバイムシ（1）

高　橋　寿　郎

グンバイムシ科（Tingidae）のものは半翅鞘が細かい網目状をしていて lace-bugs ともいわれている。食植性の小形種である。よく見るとなかなか面白い格好をしていて捨て難い虫であるが、何分にも小さいのであまり注意が払われていない様であるが、種々の植物を加害する害虫として忘れることの出来ない種を含んだグループと考えられる。

日本産のグンバイムシに就いての研究は SCOTT に始まり（1874,1880）、UHLER（1896）、HORVATH（1912）その他一・二の外国人により断片的に記載された以外は松村松年博士が数種の記載をされている位であまりなかったが、なんと言っても武谷　直氏による一連の分類学的研究（1930,1931,1932,1933,1951,1962,1963）によりほとんどその全貌がわかってきていると言うのが現状であると思われる。特に武谷　直氏の報文には図が多く入って全般に検索表もついているので同定には大変助かる。図説としては原色図説をふくめて江崎悌三博士（1950,10種）、宮本正一博士（1965,22種）、日浦勇氏（1977,11種）とあり科の概説としては武谷　直氏（1931,1962）、石原　保博士（1971）のものがある。さらに C. E. LEE による24種の幼虫の図説（主として5令幼虫）、並びに20種の♂交尾器の図説は大変貴重である（1969）。

日本産本科のものは何種類なのか。最近出版された"日本産昆虫総目録. I"（1989）によると日本産グンバイムシ科は2亜科、25属、69種が収録されておりA記号で日本に分布すると予想される種類に対してこの数字は90%以上になるとなっている。

兵庫県からのこのグループの記録は大変古くまず井口宗平氏が1908年には佐用郡産5種（内2種はよくわからない）を記録しておられる。武谷　直氏の一連の分類学的研究（1931,1951,1962,1963）の中でも井口宗平氏採集の播磨産のものは13種も記録しておられ、内1種は播磨産をタイプに武谷直氏の記載された種もふくんでいる。その後山本義丸氏は（1954,1958）氷上郡から7種を記録、1973年友国雅章氏は淡路島から4種を記録されている。高橋　匡氏は但馬から3種を記録された（1975）。筆者も県下のまととめを発表させて頂いて12種を記録した（1974）。大体以上が兵庫県下から発表されたこの科の報告であると思われる。

筆者は好きな虫の関係で出来るだけ注意して採集してきたのであるが、何分にも片手間での調査で充分な資料がまだ集っていないのであるが、今迄の記録と筆者の資料をもとに現時点でこの科の兵庫県産をまとめて見ることにした（前回の発表で同定違いもあったりするので―）。何分にも資料が少

なく、特に県中央部から北の部分ではとんど見るべき資料もなく筆者も未調査なので出来るだけこれ等の地域の調査をやらなくてはと考えている。

上記諸士の記録と筆者の資料で今回まとめた兵庫県産グンバイムシ科は17種であり、日本産の半数にも達していない。これは余りにも少ないと考えられる。今後の調査に期する所大といえる（都合で分割発表させて頂く御了承の程をお願いする）。

Family Tingidae　グンバイムシ科

Subfamily Cantacaderinal STÅL

1. *Cantacader lethierryi* SCOTT, 1874　ウチワグンバイ

本種は SCOTT' により G. LEWIS の日本で採集した標本に基いて新種記載されたものである。産地が記されていない長崎産であるのか、兵庫産のケースも考えられる。

江崎博士は図説の際、本州及び九州に産するが少ないとされている。宮本博士も越冬中の成虫は雑草の根際、石下などで発見されるがまだ宿主植物や幼虫が発見されていないと記しておられる。兵庫県下の記録でもいわゆる寒い季節での採集が多いようでこの点、分布は広いが（本州、佐渡、四国、九州、台湾）採集されることが少ないのではないだろうか。LEE による5令幼虫と♂交尾器の図説がある（1969）。

産地：神戸市［17—XII—1937, K. KUROSA leg., TAKEYA, 1962］*、宵谷［2 exs., Mar. 1934, 足立、1934］、白川（2exs., 22—II—1979）。Harima, Prov.［I・II—1953, S. Iguch I leg., TAKEYA, 1951, 1962］。氷上郡［山本、1954, 1958］。豊岡市内［15—IX—973, 高橋、1975］。

Subfamily Tinginae STÅL

2. *Agramma nexilis* (DRAK, 1948)　ズグロナガグンバイ

DRAKE は *Serenthia* 属で記載している。原記載を見ていないので良くわからないが北海道と台湾で採集されたものによって記載されている様である。江崎博士は広島県三段峡産で本州に分布していることを報じられたと同時に図説もしておられる（1950）。一応江崎博士も武谷氏も *Serenthia* 属に扱っておられるが1962年武谷氏は *Agramma* 属の種にされ、同時に DRAKE の記載した *Serenthia japonica* もこの種のシノニムにされている。

宮本博士もカラーで図説され蔭地または湿地のスゲその他雑草間で発見されるとされている（1965）。日浦氏の原色図説もある（1977）。

---

*産地のところで［　］の中のものは記録からの引用、（　）の中のものは筆者採集標本所有のもの

兵庫県下からは淡路島から知られているだけである。恐らく調査不十分のせいと思われる。LEE による5令幼虫、♂交尾器の図説がある（1069）。

産地；洲本市三熊山［6 exs.，IX—1972，友国、1973］

3．*Perissonemia occasa* DRAKE, 1942　ヒゲナガグンバイ

Drake により Japan を産地に記載された（1942）（詳しい産地の記入がないと）。その後武谷氏は井口宗平氏採集の播磨産を記録された（1942）。図説が見られないので良くわからないが、同属の台湾産の記載を武谷氏がされた際（1962）、全形図を入れておられるので大体の見当はつけられる。筆者未採集である。

産地：Harima Prov.［2—VII—1906，S. IGUCHI leg.，TAKEYA, 1962］

4．*Copium japonicum* ESAKI, 1931　ヒゲブトグンバイ

江崎悌三博士が1931年命名記載された種である（Paratypus に井口氏採集の Harima 産 lex. が含まれている）。兵庫県下での記録は古く井口宗平氏が佐用郡を産地に記録されている（1908．学名は *Capium clavieorna* となっている）。

図説は江崎博士（1950）、宮本博士（1965）、立川周二氏（学研中高生図鑑　昆虫III、1975）、日浦氏(1977) とある。イヌコウジュ・シモバシラ・ツルニガクサなどの花蕾に寄生し、嚢状の虫瘿をつくることで良く知られている。分布も広いのであるが兵庫県下からはほとんど記録がないし、筆者も未採集である。多分調査不充分のためと考えられる。LEE による♂交尾器の図説もある（1969）。

産地：佐用郡［井口、1908］。Harima［S. IGUCHI leg.，TAKEYA, 1931，1951，1962］

5．*Tingis ampliata* (HERRICH-SCHÄFEER, 1839)　アザミグンバイ

Mananthia 属で記載された種である。

成虫は夏季アザミの葉の裏面にすむが幼虫は花蕾苞の鱗葉の間で生活することが知られる。ヨーロッパ及びアジア大陸の温帯圏に広く分布する種である。図説も江崎博士（1950）、宮本博士（1965）、日浦氏（1977）とある。

兵庫県下にも広くいるように思われるが、どうしたわけか次の記録を知るのみである。今後の調査に待ちたい。

産地：氷上郡［山本、1954，1958］

6．*Acalypta sauteri* DRAKE, 1942　マルグンバイ

本種は樹幹に付着したコケの間に生息する種として知られている。図説は宮本博士のものが知られ

ている位であったが（1965）、友国雅章氏による *Acalpta* 属の日本産の分類学的論文（1972）の中で図をつけて記載しておられると共にその産地を詳しく記しておられる。これを見ると割合広く分布している種のようである。LEE は♂交尾器を図説している（1969）。

兵庫県下からは淡路島の産が知られているだけである。

産地：三原郡論鶴羽山［6♂、9♀、nymphs 2—I—1965, M. SAKAI leg., TOMOKUNI, 1972. 5 exs., X—1972, 友国、1973］。洲本市先山［11exs., X—1972, 友国、1973］。

7. *Uhlerites debile* (UHLER, 1896)　ヒメグンバイ

UHLER により、*Phyllontocheila* 属で記載された種である。武谷氏による詳しい図説がある（1931）。LEE は1—5令幼虫、♂交尾器を図説している（1969）。

クリ・クヌギ・コナラなどの葉裏に寄生することが知られている普通種。兵庫県下でもごく普通に採集できる。

産地：洲本市先山［友国、1973］。川西市能勢妙見山（lex., 30—VII—1982）、神戸市烏原（lex., 27—V—1980, lex., 9—V—1981, 2 exs., 14—V—1981, lex., 20—VIII—1981, lex., 5—V—1982, 2 exs., 6—V—1982, 4 exs., 18—V—1982, 3 exs., 23—VII—1982）、伊川谷前開（lex., 19—V—1988, 2 exs., 21—IX—1988）、Harima［TAKEYA, 1931, 1951, 1962］。三木市細川中（lex., 19—IX—1985）、口吉川町（lex., 3—X—1986）。美嚢郡吉川町（lex., 29—VIII—1985）、奥山（les., 8—V—1986）。多可郡鳥羽（lex., 6—IX—1975）。竜野市神岡（lex., 8—IX—1988）。佐用郡［井口、1908］。揖保郡鷄籠山（lex., 27—V—1970）。氷上郡［山本、1954, 1958］。城崎郡日高町奈佐路（lex., 19—VI—1986）。

8. *Uhlerites latius* TAKEYA, 1931　クルミグンバイ

井口宗平氏採集の Prov. Harima, Honshu 産を Holotype に（詳しいデータ無し）して武谷直氏が *Uhlerites latiorus* TAKEYA ミツマタグンバイとして記載された種である。図もついている。その後県での記録が全く現れていないし、筆者も未採集である。

宮本博士の原色図説もある（1965）。オニグルミの葉裏に寄生するとのことで分布は本州、九州、支那とあるがそれほど普通に見られないのかもしれない、LEE による4，5令幼虫及び♂交尾器の図説がある（1969）。

産地：Prov. Harima［Holotype. S. IGUCHI les., TAKEYA, 1931］。

9．*Stephanitis ambigua* HORVÁTH, 1912　ヤマコウバシグンバイ

江崎博士と武谷氏の図説がある（1931）。武谷氏は朝鮮ではダンコウバイを食するとされ（1951）、九州ではヤマコウバシ（*Lindera glacum* BLUME）の葉を食しているのを採集したとも述べられておられる（1953）。さらに信濃ではシロモジを食していると記されている（1963）。LEE により4，5令幼虫及び♂交尾器が図説されている（1969）。県下では次の記録を知るのみである。

産地：Akashi［HORVÁTH, 1912—TAKEYA, 1951］

尼崎西南部の昆虫（その2）

新家　勝

Ⅳ　Lepidoptera　鱗翅目

1　Hesperiidae　セセリチョウ科

(1)　Pelopidas mathias oberthüri Evans　チャバネセセリ

1945.10.17

セイタカアワダチソウの花に群がるイチモンジセセリに混じって吸蜜していたもので、多くはなかった。

(2)　Parmara guttata Bremer et Grey　イチモンシセセリ

1950.8.20

オオイボタ、ヘチマ、セイタカアワダチソウの花に多数吸蜜に来た。

2　Papilionidae　アゲハチョウ科

(1)　Graphium sarpedon nipponum Fruhstorfer　アオスジアゲハ

1947.6.30　1♂，1947.7.18　1♀，1950.4.16　1♂，1949.6.30　1♂

ネギ、オオイボタの花によく吸蜜に来た。いたるところのクスノキで発生していた。

(2)　Papilio machaon hippocrates C.et R. Felder　キアゲハ

1943.8.11　1♂，1950.6.18　1♀

8月、日当りのよい武庫川堤防の斜面で見られたが、不思議に春型を見たことはなく、少